自らの創造力・表現力を高める 教員全員指導による卒業設計

Diploma Design Focusing on Creativity and Presentation Skills Taught
by All the Faculty Staff

山本圭介^{*1}
Keisuke YAMAMOTO

1. 本学建築学科のおかれた状況

新たな学際領域開発のために行われた学部改編により、建築学科が旧工学部から新設の未来科学部に移って今年の3月で丸4年が経過した。新学部移籍後の目標である「広い視野を持つ即戦力の人材育成」のために設定した6年一貫教育カリキュラムのもと、初めての学部卒業生を今年の春に送り出したところである。そのうち学年定員の6割にあたる60名の学生が大学院に進学し、2年後の社会参加に向けなお一層の研鑽に励んでいる。

2. 建築学科の教育方針

建築学科が新たな第一歩を踏み出すにあたって、新学部のモットー「プロの能力、豊かな教養」を踏まえつつ、リーダーとなる即戦力の技術者を養成することを教育目標に掲げた。それを実現するために、学部の4年間で前後期週4コマずつの「設計演習」を核としたデザイン統合教育を徹底して行い、大学院ではそれらに加えて長期のインターンシップを実施して実務の実情を知り、オンザジョブトレーニングで実戦力を身に付けることを教育方針として掲げた。さらに学内に実務を行う設計事務所を設立し、インターンとして大学院生を受け入れて実務教育を施し、大学と社会の結び付きを強めているのもこうした流れの一貫である。運営には専任の大学教員2人があたり、歴史的建築物の保存と再生や街づくりのサポート、公共建築物の耐震改修業務などを行っている。これは医学部における付属病院にあたるものであり、建築設計という社会的責任の大きい職能に就く人材を育てるには必要不可欠の仕組みだと考えている。

3. 卒業設計の果たす役割

建築学科における設計演習は、学生が建築空間をトータルに学ぶ唯一の機会と言っても過言ではない。

その中でも卒業設計は6年一貫教育カリキュラムの中で、設計統合教育の中間の締めくくりとして、重要な役割が与えられている。

卒業設計の目的は三つある。一つはオリジナリティーに富んだ発想力の養成である。一年間かけてこの課題に取り組む学生達は、現在の社会が抱えている問題を自分自身で発掘し、その解決方法を具体的な建築的提案で示さなければならない。テーマを見つけ出すのは自分自身なのだ。その訓練は担当教員との間での徹底したやり取りの中で行われる。

二つ目は設計をまとめあげる技術力の養成である。自分のアイディアを具体の空間にまとめあげていくには、問題を整理する思考力、その解決方法を組み立てる構想力、それを建築の形に紡ぐ造形力が必要とされる。この能力はひたすら手を動かすことの中で培われる。

そして三つ目がコミュニケーション力の養成である。どんなに素晴らしい考えがまとまっても、他の人、なかでも建築しようとしている人に、正確にそして心を動かすように伝わらなければ何の意味もない。図面や模型による表現に加え、手書きのスケッチや文章による内容の伝達、そして何よりもそれらを用いて直接相手に訴えかける会話が求められる。この能力を高めるには、できるだけ多くの発表の機会に立ち会うことである。

4. 卒業設計教育の進め方

このような内容を含む卒業設計教育は、分野の異なる常勤教員18名によって行われる。この科目は必修で1学年約100名の全学生が意匠設計・構造設計・環境設備設計の各分野ごとに与えられるテーマにそって履修する。その指導方法は徹底した個人指導のエスキース（学生の計画案に対する教員の添削指導）と節目毎の発表会・講評会時の指導教員全員による討論・講評によって進められる。前者は学生一人一人に担当の教員が付き、毎週一回指導が行われる。学生はそのつどスケッチや図面、模型等の具体的な成果物を求められ

平成23年8月16日受付

*1 東京電機大学未来科学部

図1 最終講評会風景 1

図2 最終講評会風景 2

る。テーマの設定から始まり敷地の選定や計画案のプログラムそして具体的な建築空間の形に至るまで、適切な助言を与えて設計の方向性をチェックし作業の進行を後押しする。後者の発表会・講評会は半期で4回開催される。ポスターセッションによるテーマ発表会から2回の中間講評会、そして巨大な模型と美しくプレゼンテーションされた多くの図面を用いた最終講評会まで、常に全員が発表して全員が講評を受けることになる。講評者は常勤教員に加えて、実務に携わっている非常勤教員も加わり、毎回一人20分以上に及ぶ厳しいやりとりが行われ、各人の構想や造形に対して様々な意見が出される。学生達はそれらを咀嚼し計画案の内容を高めて行くのだ。そして2月の最終講評会では、多くのオーディエンスを前にして、精一杯のエネルギーをかけてつくりあげた巨大な模型と10枚以上のA1版図面、それらに加えてパワーポイントを用いて、学生達は一世代のプレゼンテーションを行なう(図1, 2)。こうしたプロセスを経て最優秀作品が選出され、さらに建築学会の会館付属ギャラリーで行わ

図3 学生優秀作品 (西島要)

図4 学生優秀作品 (斉藤誠)

れる優秀作品展や外部の卒業設計展への出品作品が教員の合議で決定される。この一連のやり取りを通して学生達は着実に発想力と設計の技術力そしてコミュニケーションの力を身に付けていくのだ。

5. 卒業設計教育の成果

昨年度800名近い建築を学ぶ全国の学生が参加して開催された卒業設計展で、上位5人の優秀者のうち本学の学生が2人もその中に選ばれた(図3, 4)。この結果は徹底した個人指導と教員全員による講評という教育方法の成果だと考えている。

2年後、6年一貫教育で育つ即戦力の優秀な人材を世の中に送り出せるよう、更なる努力を継続して行く所存である。